昏　睡

このようにして、僅かに、硬さを帯びた蝉は、
太陽の糖蜜に割り入る。
十数年の昏睡の果てに、存命の約束の名に於いて。

　胸部の空白が彼らの名を空中に拡散する。

そういう訳で、未だに、水気を帯びた紫陽花は、
葉らの奥の空白に泉を隠す。
十数年の彷徨の果てに、数滴の白湯を捧げ持つその名に於いて。

　葉裏の空白が彼らの薄明を永遠に維持する。

　　随分と遠くから、声が聞こえている気がする。
　　対岸に何か居て、胸びれを紅く染めている。
　　顔が分からない。話しかけられている気がする。
　　声が聞こえない。差し向かいにいる。
　　日々の向こうで、僅かに肘を引かれている。

そして睡魔の包容のさなかで、熱と湿り気とを得た彼らは、
さえずりの間に間に、頸を傾げる。
十数年の沈黙の果てに、彼らの墜落の速度について。